

生かし生かされて

ボケさん老人のために自宅を開放する計画を進めている話を、本紙が報道していた。大分市の安村悦司さんご夫妻で、長年勤務した精神病院を退職した機会に、その経験をボケさんのために生かそうとしている。それは自分を生かすことにもつながる。意欲ある晩年への新出発は敬服にたえない。ボケさんにとって必要なのは、共に歩んでくれる心だけである。

似た生き方をされている人に宇佐市の若山良子さんがいる。彼女は児童施設に三十年を捧げるがごとく勤めていたが、知恵遅れの女の子二人を、社会適応ができるまで預かって共同生活をしている。「初めはこんな仕事をするのでなかったと後悔することが多かったが、この子らには真心しか通じないと、やっと分かってきた」と述懐されている。

彼女が重症障がい児施設で保母をしていたころ、子らのおむつの乾きぐあいをはほに当てて確かめていたのを思い出すが、いとおしくてならぬ親身の愛が、ここにまた

復活されている。

己に眞実生きること、人のために生きること、二つを一致させている人生は輝いている。

『暮しの手帖』が「変なスーパー」として紹介した話を、ここで連想する。この店はパートタイムの主婦五十人が経営参加し、三年になるが辞めた人はいない。十時から午後一時までの開店だから、子持ちの母には好都合。経営者は自信をもって、「働きやすい店はお客のための店でもあるはず」という。

商売でもそれが可能であれば、福祉の仕事でもそうなるべきである。福祉現場はだれかが犠牲になって維持されているよりは、お互いが生かし生かされ合う世界であるほうがずっと望ましい。

そのことを可能にするもの、それは愛である。

(一九八四年五月八日)